

居合道用語の手引

居合で使われる用語とその意味を五十音順にまとめました。

2021/10/01

by KENZOU

＜居合道用語の手引・目次＞

【あ行】	・座礼→立礼	8	・寝刃（ねたば）	14	
・足捌き（あしさばき）	2	・残心	8	・寝刃を合わす	14
・居合術	2	・三付け	8	・納刀	15
・居合腰	2	・四戒＝四病	8		
・居合刀	2	・止心（ししん）	8	【は行】	
・一足一刀の間合い	3	・地びき	9	・袴捌き（はかまさばき）	15
・一眼二足三胆四力	3	・鎗（しのぎ）	9	・刃筋	15
・居付き	3	・縮地法（しゅくちほう）	9	・刃引き	15
・陰の構え	3	・上段の構え	9	・八相の構え	15
・入り身	3	・上虚下実（じょうきょかじつ）	9	・刃紋	15
・受流し	3	・触刃（しょくじん）	9	・半身	15
・打刀	3	・序・破・急（じょはきゅう）	9	・ひかがみ	15
・打太刀・仕太刀	3	・守・破・離（しゅはり）	9	・一重身	15
・えます→騎馬立ち	4	・撞木足（しゅもくあし）	9	・樋（ひ）	15
・遠山（えんざん）の目付	4	・真剣白刃取り	10	・樋鳴り	16
・演武	4	・水月（すいげつ）	10	・開き足	16
・大血振るい	4	・隙き（すき）	10	・袋竹刀	16
・送り足	4	・素振り（すぶり）	10	・武道の精神	16
・起こり	4	・脛囲い（すねがこい）	10	・踏み込み足	16
		・摺り足（すりあし）	10	・振冠り（ふりかぶり）	16
【か行】	・青眼の構え	10	・不離五向（ふりごこう）	16	
・介錯（かいしゃく）	4	・正対する（せいいたい）	10		
・仮想敵	4	・制定居合	11	【ま行】	
・刀の握り方	4	・正中線	11	・間合い（まあい）	16
・構え→五行の構え	5	・切羽（せつば）	11	・間境（まさかい）	17
・観の眼→目付	5	・先を取る	12	・峯（棟）（みね）	17
・気位	5	・反り	12	・見取り稽古	17
・斬り方	5	・反りが合わない	12	・無双直伝英信流	17
・切っ先	5	・躊躇（そんきょ）	12	・明鏡止水（めいきょうしすい）	17
・逆袈裟	6			・目釘（めくぎ）	17
・虚実（陰陽）	6	【た行】		・目付（めつけ）	17
・斬り下ろし	6	・大・強・速・軽	12	・目貫（めぬき）	18
・栗型（くりがた）	6	・太刀	12	・無構え	18
・稽古	6	・太刀筋	12	・木鶏（もくけい）	18
・袈裟斬り	6	・丹田（たんでん）	12	・物打ち	18
・剣先	6	・戸山流居合	13		
・気剣体一致	6	・血振り	13	【や行】	
・懸体一致（けんたいいち）	6	・中段の構え	13	・鱧目（やすりめ）	18
・交刃（こうじん）	7	・柄（つか）	13	・柔	18
・鯉口（こいくち）	7	・柄木	13	・陽の構え	18
・紅葉の目付	7	・柄巻き	13	・湧泉（ゆうせん）	19
・五行の構え	7	・継ぎ足	13	・横の血振るい	19
・呼吸	7	・鏢（つば）	13	・四節の礼	19
・鑑（こじり）	7	・手の内	13		
・古流	7	・道場	14	【ら行】	
・五輪五常（ごりんごじょう）	7	・刀礼	14	・理合（りあい）	19
				・立礼	19
【さ行】	【な行】			・礼式	19
・下げ緒	8	・茎（なかご）	14		
・鞘当（さやあて）	8	・薙（なぎ）	14	【わ行】	
・鞘の中	8	・なんば歩き	14	・脇構え	19
・鞘離れの一刀	8	・抜き打ち	14		
・鞘引き	8	・抜き付け	14		

【居合道・用語解説】

◆あ行

・足捌き（あしさばき）

足捌きは「歩み足」「送り足」「継ぎ足」「開き足」の4種類がある。足捌きの重要なポイントは腰にあり、動くたびに腰が上下するのではなく、いつも同じ高さになるようにする。

★歩み足：日常の歩き方と同じ。大きく間合いが離れたときなど、素早く間合いを詰めたいときに使う。

★送り足：移動する方向に近い足から移動し、遠い方の足を素早くひきつける。移動したあとは、常に同じ形にすることで攻撃や防御を素早く行うことができる。

★継ぎ足：構えた位置から左足を右足の近くまで引きつけ、右足で大きく前に出る足捌き。少し遠い間合いから攻撃するときや、相手に気づかれずに自分の間合いにもっていききたいときに使う。

★開き足：相手の攻撃や、動きをかわしたりするときに使う、相手を中心に円を描くような動きをするための足捌き。

・居合術（いあいじゆつ）→仮想敵

居合は仮想の敵を念頭において組み立てられた刀法である。鞘から刀を抜き放つ動作で敵に一撃を加えるか、敵の攻撃を受け流し、二の太刀で敵に止めを刺す形・技術を中心に構成された^{とど}武術。居合の最も大切な点は、抜き付け、斬り下して、必殺の^{きはく}気魄をもって行うこととされる。

剣術との相違点は、剣術は初めから互いを敵とした敵対動作から始まる、いわゆる敵との「立合」から始まるのに対し、居合道は主に床の間での想定のような普段の生活の中など、「居」ながらにして敵に「合う（遭遇する）」として形が組まれている点にある。

居合術は戦国時代、林崎甚助重信(1542?-1621)が始めた林崎神明夢想流が最初とされる。無双直伝英信流、夢想神伝流、伯耆流（ほうきりゅう）、重信流（じゅうしんりゅう）、田宮流、関口流、無外流、新陰流等、多くの流派が今に伝わる。各流派の主な特長は次の通り。

★英信流、神伝流：業のバリエーションも多く、様々な状況に対応した多彩な技法を有する。

★伯耆流：斬撃や刺突の際に「エイッ!」、「ハッ!」と大きく発声する。

★重信流：居合の源流とも言われる。

★田宮流：理路整然とした技法群と品格ある剣風で「美の田宮」、「位の田宮」とも称される。

★無外流：素早い連続技や拳の当て身など。

★新陰流：個性的な技が特徴的。

★関口流：斬下ろしの際に激しく両足を交差する飛び違い切りでその名が知られる。

・居合腰（いあいごし）

両膝をわずかに曲げ、腰を落とした姿勢。

・居合刀（いあいとう）

主に亜鉛合金を素材とし、鋳型に流し込んで固め刀身としたもの。刀身以外の柄、^{つば}鐔、鞘などの^{こしら}拵えはほぼ真剣と同様のものが使われている。

銃刀法では真剣のみならず、模造刀剣類の携帯も禁じているので、例えば合金製で切れる刃の付

いていない居合刀や模造刀であっても、ケースに入れずに持ち歩いたり、公共の場所で抜きはなったりすると犯罪として処罰されることになるので注意。なお、日本刀は文化財として位置付けられており、「銃砲刀剣類所持等取締法」に規定される「銃砲刀剣類登録」が必要となる。

・一足一刀の間合い（いっそくいっとうのまあい）

一步踏み込めば相手を打突^{たどつ}でき、一步下がれば相手の打突を外すことのできる間合いのこと。基本の間合い。

・一眼二足三胆四力（いちがん・にそく・さんたん・しりき）

剣道修行の大事な要素をその重要度に応じて示したもの。

☆「眼」：相手の動静を察知する「目付け」。

☆「足」：業の根元は足であり、足の踏み方使い方は剣道で最も重要視される。

☆「胆」：気力・意志力・忍耐力・持久力。

☆「力」：体力でなくて技術の力。業前^{わざまえ}のことである技術を意味する。

・居付き（いつき）

足が止まり、動きが止まって、咄嗟^{とっさ}に動けなくなること。攻防の動作中に瞬間的に休止状態に陥り、対応動作が出来なくなった状態。棒立ちになったり、重心を落とし過ぎたりして咄嗟に動けないような状態。注意力が散漫になったり、恐懼^{きょうく}疑惑に捉われて心の自由がとらわれた状態のこと。

・陰の構え（いんのかまえ）→八相の構え、陽の構え

八相の構え、木の構えともいう。立て物（飾り）がある兜を着用している際に刀を大きく振りかぶるのが難しい場合の上段構えである。

・入り身（いりみ）→半身

敵の中心（軸）をずらしながら（横に回りこむような感じで）攻撃がしやすいように自分の間合いを詰める（体を寄せる）こと。

・受流し（うけながし）

敵の斬撃を鎬^{ざんげき}（刃）^{しのぎ}で受け（柄が上となり切先を下げた状態）つつ、敵の刀を斜め下に落とす技法。神伝流では鎬で受けるが、新陰流では刃を使う。前者は刃毀れ^{はこぼ}を、後者は刀が折れる事を考慮して、そういう受けをする。これは互いの理合の問題で、たとえば新陰流では、刃毀れしても武器としての攻撃力は失われないが、折れば終わりという考えから、相手の刀に対して刃をもって受けるとされている。どちらが良いというわけではない。

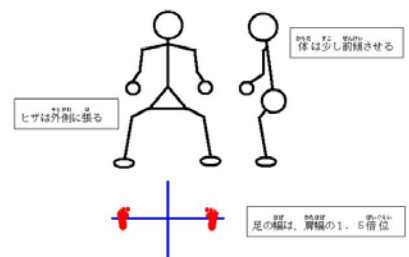
・打太刀・仕太刀（うちだち・しだち）

剣術形をおこなう時、師の位にあって常に技を仕掛け、その技に応じて理に叶った技で勝つ方法を教える側を打太刀といい、逆に弟子の立場にあって打太刀の仕掛ける技に応じて正しい勝ち方を習う側を仕太刀という。

・えます→騎馬立ち

騎馬にまたがるような立ち方。全ての空手において共通する立ち方。

- ・肩幅よりも大きく足を開く
- ・空気椅子のような角度になるまで腰を落とす



- ・背筋をまっすぐにして腰を引く
- ・足のつま先はまっすぐにする
- ・膝は外側に出しすぎず、内側に入れすぎない

・遠山の目付（えんざんのめつけ）→目付

目は相手の顔面につけるが、一点を凝視するのではなく遠い山を見るように相手の体全体を視野に入れること。

・演武（えんぶ）

居合を抜いて人に見せる事。奉納など公式に居合を抜く場合なども演武という。

・大血振るい（おおちぶるい）

切先を下に向けたまま柄をやや回すようにして右こめかみの横まで引き上げ、右下に刀身を袈裟に振りながら（雨傘の^{しづく}雫を振り切るのと同じ要領）、後ろ足を前足に引き付けるようにする。右こめかみ横まで柄を引き上げた時、右手は挟むように^{つか}柄をもち「敬礼」のような形となるようにする。

・送り足（おくりあし）→足捌き

右に進む時は右足を先に動かし、その後に左足を右足に引き付ける動き方。後ろ足の^{かかと}踵は少し浮かせ、いつでも踏み込めるようにする。前後左右で素早く動く時に有効。

・起こり（おこり）

技をだそうとして身体が動き出す寸前の予備動作を言う。

◆か行

・介錯（かいしゃく）

武士が切腹をする時に、痛みを軽減させるために首を斬る事。一太刀で斬らなければならないため、かなりの熟練した者が行った。

・仮想敵（かそうてき）→居合術

自らが仮想する敵。

^{わざ}業の容義を深く理解して自己の内面や身体の動静の細部に至るまで客観視して気を配り、心を落ち着かせて演武をする時はじめて心の中から作り出される己自身のイメージともいわれる。実際の稽古で気をけなければならぬのは仮想敵との間合である。仮想敵との間合は自分の想像で決めるので、一撃で敵を倒せる間合をよく考えて稽古することが大事。

・刀の握り方（かたなのにぎりかた）

親指と人差し指は浮かす心持で相手の方に向け、中指は閉めず^{ゆる}緩めず、薬指と小指を絞める心地で手の内に緩みがないように握る。指の握りのポイントは中指。両拳とも柔らかく握ることが肝要。特に左手の役割は重要で、左手で切り右手はその手助けをする意識が大切。右手に頼りすぎた握りでは刃筋の通った斬り方はできない。

・構え（かまえ）→五行の構え

中段の構え、上段の構え、下段の構え、八相の構え、脇構えの五種類がある。

★中段の構え：剣先を相手の目に向けて構えるもので、正眼の構え、人の構え、水の構えとも呼ぶ。

- ★上段の構え：刀を頭上に振り上げる構えで、前にある足によって左上段と右上段に分けられる。
- ★下段の構え：刀の剣先を水平より少し下げた構え方で、上段に対し防御の構えと言われるが、機敏に動けないために攻撃には向かない。
- ★八相の構え：刀を立てて右手側に寄せ、左足を前に出して構える、野球のバッティングフォームに似た構え方。この構えを正面から見ると前腕が漢数字の「八」の字に配置されていることから名付けられており、刀をただ手に持つ上で必要以上の余計な力をなるべく消耗しないように工夫されている。
- ★脇構え：右足を引き体を右斜めに向け刀を右脇に取り、剣先を後ろに下げた構え方。相手から見て自身の急所が集まる正中線を正面から外し、こちらの刀身の長さを正確に視認できないように構える。

・観の眼（かんのめ）→目付

かんけん つか
観見の眼の遣いと言われて、敵の身体つきや表情を観察して事前に多くの情報を読み取る。つまり、戦術的な観察の仕方を言う。目付には、観と見の二つの目付があり、宮本武蔵の五輪書の中の一節「観の目つよく、見の目よわく」とは、心の動きを見落とさぬようにすることが大切との意。

・気位（きぐらい）

気品ともいう。居合道ではこの気位が業の^{わざ}内容に大きくかかわっている。単に斬ればよいというのではなく、その業から発せられる気位、気品というものが重要とされている。居合道は仮想敵に対する業であるが、その中に心が存在していなければならない。その心を気位といい、高段者になればなるほど心のあり方が重要視され、単なる刀法ではなくなる。内から湧き上がるような心のあり方がその技の内容を高め、より深いところへ登ることができるのである。

・斬り方（きりかた）

刀を振る時、斬りたい線に対して刃先から^{みね}棟が揃っていないと斬れない。実際に斬りにくい順番は次のようである。

- ①真向：真上から真下に斬るのだが、両手の力は揃いにくく、左手が主体で右手を添えて斬るので力のバランスが崩れやすく、真っ直ぐ垂直に斬るのは難しい。
- ②片手水平：抜き打ちで横に斬るが、これもかなりの条件が揃わないと少し斬り込むだけになりやすい。
- ③片手袈裟：敵の首付近を抜き打ちで上から斜めに斬る。状況によっては、敵の右肩から左脇まで斬れる。刃筋とともに体重を乗せることもポイント。
- ④片手逆袈裟：抜き打ちで、敵の右脇下から左肩上に切り上げる斬り方。半身から腰をひねったりもする。すべての抜き打ちは、刀を持つ右手よりも^{さや}鞘を引く左手が重要。
- ⑤水平：敵の右腹から左腹(右水平)、または左腹(左水平)から右腹への斬り方。
- ⑥逆袈裟：両手で、敵の右脇下から左肩上に切り上げる斬り方(右逆袈裟)。もしくは、左脇下から右肩上に切り上げる(左逆袈裟)。両手をしっかり握ったままでは切先が伸びずに苦勞する。どちらから斬るにせよ、片方の手はほとんど握らないか柔らかい握りになる。

※「燕返し」：袈裟から即時の逆袈裟に斬る業。

- ⑦袈裟：両手で、敵の左肩から右脇下に切り上げる斬り方(左袈裟)。もしくは、右肩から左脇下に切り上げる(右袈裟)。

・切っ先（きっさき）→物打ち

刀身の先端部分、銚子（ぼうし）ともいう。物打ちとは異なる。^{ものう}

・逆袈裟（ぎゃくけさ）→斬り方

敵の右肩から左脇腹へ刀で切り下げること。

・虚実（陰陽）（きよじつ(いんよう)）

フェイントと本気の攻撃。あるいは、防御と攻撃の駆け引きを言う。

・斬り下し（きりおろし）→斬り方

振りかぶった状態から、丹田に力を入れ、手の内を効かせて両腕を伸ばし、切先^{きっさき}が大きな半円を描くように真っ向から振り下ろす。刀身は立業^{たちわざ}では床と平行、居業^{いわざ}では切先が床上七寸で止める。小指と薬指を十分に締めて、両手を少し内に絞込む気味で手首を曲げ、両手の握力量は左手六、右手四くらい^{きはく}の気持ちにする。腰で斬るため、両膝は自然に少し進む。敵の真向より腰まで斬り下ろす^{きはく}気魄が大切とされる。

・栗型（くりがた）

^{さげお}
下緒を通す穴。

・稽古（けいこ）

習った事を練習する事。武術や芸を学ぶ事。一般的に日本的なものを学ぶのを指すことが多い。

・袈裟・袈裟斬り（けさぎり）→斬り方

敵の左肩から右脇腹にかけて斬り下げること。

・剣先（けんさき）

剣の先端の部分。又は剣が向かっている先のこと。剣先の位置は中段の構えなら相手の咽元あたりの高さに構えるのが一般的。この剣先が相手に効いているか効いていないかで、相手に与える威圧が天と地ほどの差が出る。

・気剣体一致（きけんたいいっち）

斬り付けた瞬間と足の踏込みが一致すること。そうすることで体重が載った鋭い斬り付けが可能となる。

・懸待一致（けんたいいっち）※懸待一致 = 攻防一致

相手に懸^かかって行く気持ちと待つ気持ちを持つこと。攻撃と防御が表裏一体をなすもので、攻撃中も相手の反撃に備える気持ちを失わず、防御にまわっている時でも常に攻撃する気持ちでいること。

・交刃（こうじん）→触刃

^{しよくじん}
触刃からさらに近い間合のこと。互いの剣先が交わっている間合。

・鯉口（こいぐち）

鞘の入り口の部分。「鯉口を切る」：左手の親指で鐙を押すことで「はばき」を鯉口から外し、刀を鞘からわざわざに出すこと。内切・外切・控え切・隠し切などがある。

★内切り：鐙を左親指の先で押し切る。敵に察しられないように切る。

★外切り：鐙に親指を見えるようにかけて押し切る。敵にわざわざ見えるようにかける。

★控切り：親指を鐙にかけ、更に人差し指で控えるように切る。衆人の前で抜刀する前の動作。

・紅葉の目付（こうようのめつけ）→遠山の目付

紅葉している特定の葉を見つめてしまうことにより全体像を見失うことを指す。遠山えんざんの目付と逆。

・五行の構え（ごぎょうのかまえ）→構え

刀を構える基本は5つあり、「上段」「中段」「下段」「八相」「脇構え」の5つの構えをいう。

・呼吸（こきゅう）

腹式呼吸。一般的に吐くときは「実」、吸うときは「虚」といわれ、息を吸う瞬間は隙となる。業に移る時は、原則として3呼吸目を吸い込んだ後に刀を抜き始める（居合の3呼吸）。各業は1呼吸で終える事が望ましく、納刀してから軽く吐く。

・鑑（こじり）

鞘の先端部分。金属で保護されているものもある。

・古流（こりゅう）→制定居合、居合術

制定居合以外の各流派の居合。

・五倫五常（ごりんごじょう）

儒教での五つの基本的な人間関係を規律する五つの徳目「五倫」と、人が守るべき五つの徳目「五常」をいう。ちなみに、袴はかまの表の5つの襷ひだの数は五倫五常の五に由来する。後ろの一本の襷には『忠：先生や仲間を大切に思うまごころ』と『孝：兄弟を大切にすること』の2つの意味合が込められている。

☆五倫：「君臣の義」：忠誠心

「父子の親」：親孝行

「夫婦の別」：男女の役割

「長幼の序」：年長者と年少者の間に一定の秩序

「朋友の信」：友人の信義

☆五常：仁、義、礼、智、信。

「仁」：思いやり、なさけ、慈しむ心。

「義」：義理、道徳や倫理にかなった行い。

「礼」：礼儀、尊敬し、敬う心。

「智」：知恵、正しい判断をする知識。

「信」：信義、信頼、正しい心。

◆さ行

・下げ緒（さげお）

鞘についている紐のこと。下げ緒の結束には流派ごとの違いがある。

・鞘当（さやあて）

武士が途中で行き会い、互いに刀の鞘が当たったことを咎とがめたてすること。

・鞘の中（さやのなか）

鞘を払わずに（刀を抜かず）相手を屈服させ、戦わずして勝つこと。

・鞘離れの一刀（さやばなれのいっとう）→居合術

敵の不意の攻撃に対して一瞬の間もおかず居合わせて抜刀し敵に勝つ。鞘離れの瞬時の一刀で相

手を圧する心意気を持って相手を制する。

・鞘引き（さやびき）

居合の重要動作の一つ。抜刀時、左手で鞘を引く。鞘引きは、抜き付けの鍵となる。刀を抜き出し右腕で引き抜くのではなく、鞘引きと腰の捻り^{ひね}で抜刀する。

・座礼（ざれい）→立礼

（イ）刀に対する礼法演武の始めと終りに行う礼であって、始礼・終礼とする。

（ロ）教えを受ける師や先輩等、教えを受ける者に対する時は、下座に座って体に近く右側に刃を内にし、概ね鐙を膝の線に揃えて床上に置き、両手を揃えて座礼をする。

・残心（ざんしん）

動作（敵を制圧）が完了した後も、油断することなく、相手の反撃に対応できる身構え・心構え。

・三付け（さんつけ）

「目付け」「抜き付け」「着付け」の3つ。

・四戒＝四病（しかい＝しびょう）

相手に対したとき、驚^{きょう}、懼^く（おそれ）、疑^ぎ、惑^{わく}の念が生じると心に隙が出来る。これを心の四つの戒、または四病という。「驚」、「懼」、「疑」、「惑」の四つは、剣術において戒とされている。

★驚（おどろく）：突然の出来事に心が動かされ、一時心身の活動が乱れて正常な判断や適正な処置を誤り茫然自失^{ぼっぜんじしつ}してなす術のない状態をいう。

★懼（おそれる）：恐怖心の起こることで、こういう時に心身の活動が滞り進退の自由を失う状態をいう。

★疑（うたがう）：相手の心や拳動を疑って見定めない心の状態。自己の意志決定ができず決断がつかず、体の自由を失い相手の動作に応ずる事が出来ない。

★惑（まどろ）：心が疑う事で心惑う時は、精神昏迷^{せいしんこんめい}し敏速な判断も軽快な動作もできない。体力と技を練ることも大切であるが、精神的修養に努めることが大切である。

・止心（ししん）

心が或る一つ事に奪われて、他の事が見え、注意力がゆきとどかない事。注意力がただ一点に凝結して、相手の体の動きや心の動きを洞察することが出来ず、同時に自分の心の動きも堅くなり、相手に遅れをとる事となる。

・地びき（じびき）

刃以外の刀身全部を入念に研磨することで、研ぎの名称。→刃びき

・鎗（しのぎ）

刀剣の部分の名称。刀身の真ん中より棟^{みね}に寄って縦に一段高くなっている稜（側面の盛り上がっている部分）。刀を下にして構えた時左側を表^{おもてしのぎ} 縞、右側を裏^{うらのぎ} 縞という。敵の刀を摺り上げ、摺り落とし、摺り込み、刀を払うき、鎗を巧みに用いると敵の刀勢を減殺しやすい。

☆鎗を削る：戦いの時に相手の刀と刀がぶつかりあい、鎗と鎗が接して火花を散らすこともある。

・縮地法（しゆくちほう）→足捌き

足捌き^{あしさば}の一方法。遠い間合を一挙動で滑るように縮める歩法。予備動作が少なく「起こり」が読みにくい。

・上段の構え（じょうだんのかまえ）→構え

刀を頭上に振り上げた構え。別称「火の構え」「天の構え」という。一般的に攻めの構え。

・上虚下実（じょうきよかじつ）

上は虚（広さがあり、無限）、下は実（実態があり、有限である）ということ。上半身からは余計な力みが抜けていて、腹や腰あたりの下半身に力が充満している状態。

・触刃（しよくじん）→交刃

互いの剣先が触れるか触れないかの^{まあ}間合い。

・序・破・急（じよはきゆう）

「序」：始めはゆっくりと刀を抜き出し、「破」：徐々に速度を上げて、「急」：最大の速度にして抜きつける事。相手にどれだけ刀を抜いているか悟られないようにし、一気に抜きつけること。

・守・破・離（しゅ・は・り）

修行の段階の状態を云う。

★守：初歩の段階で師の教えを忠実に守り、稽古に励み、技や筋を練ること。

★破：初歩を乗り越えて前進すること。学んだ教えを自分のものにし、さらに色々な方法を学び、その長所を取り入れて、一層強力となることを云う。

★離：破を超え、一流一派を編み出し、考え出す迄になる事を云う。独自の境地を見出し、^{おうぎ}奥義を見極め、師から離れ、師以上になることを云う。

・撞木足（しゅもくあし）

足構えの一つ。腰を落として逆八の字に足を開いた（左足の爪先を外側に開く）安定性のある構え。古流の剣術は、大別して「介者(かいしゃ)剣術」と「素肌剣法」に分類され、前者は合戦の場で鎧甲を身に着けた状態での戦闘を想定しているのに対し、後者は平時に普通の服装での戦いを想定している。^{よろいかぶと}鎧甲を身に付けていれば、敵の刀身が多少我が身に当たっても大きく傷つく事はないので、鎧で身を守りつつ自分の刀が敵に十分届く^{まあい}間合いに入り込んで、敵の鎧の隙間を正確に狙うかあるいは鎧ごと叩き斬ってしまうような刀法が求められる。斬りつける部位も手足や脇、首筋など多彩であり、重い鎧を着けての近間での勝負は組み討ちまでも想定するため、腰を落として足を開いた安定性のある構え、すなわち身を沈めた「沈(ちん)なる構え」となる。足構えも爪先を開いた^{しゅもくだ}鐘木立ちが主流となる。

一方、戦国時代の末期になって鎧甲を着けての合戦の機会が少なくなると、剣術は平時の服装での戦いを想定した^{すはだけんぼう}「素肌剣法」へと変化してきた。鎧を着けない素肌での戦いになると、敵の刀身が自分の身体に触れただけで触れどころが悪ければそれが致命傷になってしまう恐れが十分にあり、重い鎧甲を着けていないために互いの動きが敏捷になり、敵の動作の隙をついての一瞬の飛び込み打ちや偶然の一撃が勝敗を分ける可能性も高くなる。互いに刀身の届かない遠い間合から、敵を斬る事の出来る間合への入り方が重要になる。互いに遠い間合で向かい合い、瞬時に動きやすいように腰を伸ばして真っ直ぐに立った姿勢、すなわち現代の剣道のような「直ぐ立った構え(新陰流)」が素肌剣法の主流となった。

・真剣白刃取り（しんけんしらほどり）

刀身を頭上で^{はさ}挟み受けるのは殺陣師が考えた^{たてし}虚構であり、実際には体を捌いて^{さば}斬撃^{ざんげき}をかわすと共に刀の柄^{つか}を取って奪う技。

・水月（すいげつ）

人体の腹の上方中央にある^{くぼ}窪んだ部位。鳩尾（みぞおち）とも呼ばれる。経穴（ツボ）であり急所でもある。内部背中側には腹腔神経叢（ふっくうしんけいそう）という神経叢があり、衝撃で横隔膜の動きが瞬間的に止まり呼吸困難に陥る。

・隙（すき）→四戒

四病といわれる「驚」「懼」「疑」「惑」の生じた「心の隙」と、剣先が相手の中心から離れたり手もとが上る、または下る等して生じた「動作の隙」や、「構えの隙」がある。

・素振り（すぶり）

刀を正しく握り、中断の構えから大きく振りかぶって握りをゆるめ、切り下ろしながら徐々に手の内を締めていく。最後の3分の一の振りで対象物を切るつもりで振り下ろす。

頭上の握り手は、緩められるだけゆるめる気持ちで持つ。右手は柄を受けて持つように、柄が乗っているだけといった感じがよい。左手で切るのに対し、右手は相手の方向に刀を押し出す働きがあるから、頭上にゆっくりと振り上げながら、小指から薬指、中指と締めながら、^{ものう}物打ちに充分力をこめた切り下ろしをする。

・脛圍い（すねがこい）

正面に対座する相手が右足に^な雑ぎづけてくるのを受け止め（受け払う心持）、敵が^{しりぞ}退こうとするところを上段より斬り下ろして倒す。

・摺り足（すりあし）→足捌き

床をするように動く。剣術の基本。動作はこの^{あしさば}摺り足を中心に足捌きを行う。

・青眼の構え（せいがんのかまえ）→構え

「青眼」「星眼」「清眼」「晴眼」とも書く。刀の切っ先を相手の目に向ける構え方。中段の構え。

・正対する（せいたいする）

相手と正面から立ち向かうこと。

・制定居合（せいていあい）→古流

全日本剣道連盟が作った12本組からなる居合の形。全剣連居合ともいう。対して各流派の形は古流と呼ばれる。

☆一本目「前」：対座している敵の殺気を感じ、機先を制してこめかみに抜き付け、さらに真っ向から切り下ろして勝つ。

☆二本目「後ろ」：背後からすわっている敵の殺気を感じ、機先を制してこめかみに抜き付け、さらに真っ向から切り下ろして勝つ。

☆三本目「受け流し」：左横に座っていた敵が、突然立って切り下ろしてくるのを^{しのぎ}鍋で受け流し、さらに袈裟に切り下ろして勝つ。

☆四本目「柄当て」：前後に座っている二人の敵の殺気を感じ、まず正面の敵の水月に^{つかがしら}柄頭を当て、続いて後ろの敵の水月を^{すいげつ}突き刺し、さらに正面の敵を真っ向から切り下ろして勝つ。

☆五本目「袈裟切り」：前進中、前から敵が刀を振りかぶって切りかかろうとするのを^{ぎやくけさ}逆袈裟に切り上げ、さらにかえす刀で袈裟に切り下ろして勝つ。

☆六本目「諸手突き」：前進中、前後三人の敵の殺気を感じ、まず正面の敵の右斜め面に抜き打ちし、さらに諸手で水月を突き刺す。つぎに、後ろの敵を真っ向から切り下ろす。続いて正面

からくる次の敵を真っ向から切り下ろして勝つ。

☆七本目「三方切り」：前進中、正面と左右三方の敵の殺気を感じ、まず右の敵の頭上に抜き打ちし、つぎに、左の敵を真っ向から切り下ろし、続いて正面の敵を真っ向から切り下ろして勝つ。

☆八本目「顔面当て」：前進中、前後二人の殺気を感じ、まず正面の敵の顔面に「柄当て」し、続いて後ろの敵の「水月」を突き刺し、さらに正面の敵を真っ向から切り下ろして勝つ。

☆九本目「添え手突き」：前進中、左の敵の殺気を感じ、機先を制して右袈裟に抜き打ちし、さらに腹部を添え手で突き刺して勝つ。

☆十本目「四方切り」：前進中、四方の敵の殺気を感じ、機先を制してまず刀を抜こうとする右斜め前の敵の右拳に「柄当て」し、つぎに左斜め後ろの敵の「水月」を突き刺し、さらに右斜め前の敵、続いて右斜め後ろの敵、そして左斜め前の敵をそれぞれ真っ向から切り下ろして勝つ。

☆十一本目「総切り」：前進中、前方の敵の殺気を感じ機先を制してまず敵の左斜め面を、つぎに右肩さらに左胴を切り下ろし続いて腰腹部を水平に切り、そして真っ向から切り下ろして勝つ。

☆十二本目「抜き打ち」：相対して直立している前方の敵が、突然、切りかかってくるのを、刀を抜き上げながら退いて敵の刀に空を切らせ、さらに真っ向から切り下ろして勝つ。

・正中線（中心軸）（せいちゅうせん）

頭の真ん中から股の真ん中を貫く線。体軸。居合では体の動きも刀の動きも正中線を意識して動作する。

・切羽（せつば）

刀の鐔^{つば}の両面には、それぞれ柄と鞘に接する部分に薄い楕円形の金属がそえてある。これを切羽と云い、何かの理由で詰まったりすると刀が鞘から抜けなくなる。

☆切羽詰まる：物事が差し迫ってどうにも切り抜けられなくなる。追いつめられて全く窮する。

・先を取る（せんをとる）

敵が攻撃しようとする起こりを読んで先手を取ることを言う。主に「後の先」、「対の先」、「先の先」の三つの対処法がある。

★先の先：相手が攻撃にいこうかと気持ち動いている隙にこちらから先に攻撃するタイミング。

流派によっては先々の先という言葉もある。要は相手より早く行動すること。

★後の先：相手が攻撃を出すのを見切って迎撃するタイミング。ジャンケンで例えると、後出しを狙うもの。相手に先に攻撃させて、捌^{さば}くなり躲^{かわ}すなり受けるなりして隙を作り、致命の一撃を与える。とはいえ、相手の攻撃を見切らなければ出来ない。

★対の先：相手が攻撃を出すのと殆ど同時に攻撃し、相手の攻撃を潰して自分の攻撃を成功させるタイミング。いわゆるカウンター攻撃。

・反り（そり）

日本刀の緩やかなカーブを「反り」という。古代刀や幕末刀には直^{ちよくとう}刀が多く、突きに有利で多用されるが、斬撃の効果は不十分であった。反りの効果は試し斬りを行なえばわかる。反りのある

日本刀は直刀と同量であっても、刀の重心が手元に近い調子がよく、軽く感じるものである。そのためにも剛刀でも長時間の使用に耐えられる。

・反(そ)りが合わない

刀の反りと、鞘さやの反りが合っていないと刀は鞘におさまらない。

・蹲踞(そんきょ)

本来はうずくまることで敬礼の一つであるが、剣道で蹲踞という場合はやや右足前につま先立ちで両膝を左右に開いて折りまげ、上体を正した中腰の右自然体の姿勢をいう。

◆た行

・大・強・速・軽(だいきょうそくけい)

武道の修行の段階を表した言葉。「大」は大業で、「強」は強く抜き付け、斬り下ろし、「速」は敏速に、「軽」は軽妙にという意。「速・軽」の技法となると相当期間の修行が必要とされる。

・太刀筋(たちすじ) → 斬り方

太刀筋とは刀の進行方向で、刃筋はすじとはその進行方向に対する刀の刃の向きのこと。居合の基本形は、上・下の抜打ちと抜き付け(横薙ぎ)よこなの三種類。

・丹田(たんでん)

俗に言う臍下丹田せいかのこと。上・中・下の三つの丹田があるとも言われるが、大抵は下丹田を指して、単に丹田と呼ばれる。

・戸山流居合(とやまりゅういあい)

戸山流は、大正から昭和初期にかけて陸軍戸山学校で制定された軍刀操法を、太平洋戦争後に居合道の流派としたもの。1925年(大正14年)制定時の編纂者中山博道を祖とし、制定当時の戸山学校剣術科長で編纂に関わった森永清を流祖として森永が戦後に技の追加と改定を加えた。

・血振り(ちぶり) → 大血振り

刀で相手を斬った後に、刀から血を落とす動作。残心を示し、相手を攻める気を抜かないこと。人の血や脂が付いた刀剣を、そのまま鞘に入れると鞘の中が血と脂で汚れ固まる。また血は塩味もあり、刀にとっては錆の原因となり大敵である。それを防ぐ為にこの血ぶりの所作を行う。各流派には、縦血振り・横血振り・回転血振り・柄打ち血振り・自分の袴で拭う血振りと様々な血振りの型・所作がある。

・中段の構え(ちゅうだんのかまえ) → 構え

最も基本の構え。基本的には剣先を相手の咽喉部いんこうぶに付けるが、左目、両眼の間、臍へそにつける構えもある。「水の構え」ともいう。

・柄(つか)

刀の手で握る部分。柄巻つかまき、柄頭つかがしら、目釘めくぎ、目貫めぬき、縁金ふちがねなどの部品からなる。

・柄木(つかき)

刀の柄には現在はその殆どが材質が均一で適度な弾力があり、細工がしやすい朴ほおの木が使われている。桜やナラ材の硬木も使われる。

日本刀発生期の毛抜き太刀は、柄も刀身と同じ共鉄で造られていたが、その当時の戦闘は片手打

ちが主流であったので、後世の両手で思い切り打ち下す打刀のように大きな力がかかることがなかった。また、柄はその中心の毛抜き型の空間によってある程度の弾力があり、柄にかかる衝撃をうまく逃がしていたと思われる。

・柄巻き（つかまき）

本刀の柄に巻く糸もしくは皮革。^{さめかわ} 鮫革の上に巻かれる。素材は大体、正絹、純綿、革でできている。紐を組紐にして、それを鮫革の上から巻いていく。

・継ぎ足（つぎあし）→足捌き

左足(後足)を右足(前足)の近くまで引き付け、その勢いで右足から素早く攻めたり、大きく踏み込んで打つ事が出来る。

・鐧（つば）

刀剣の柄と刀身との間に挟んで柄を握る手を防護する部具の名称。鐧の目的は刀を握った手を護るというよりは、突いた際に自分の手が刃の方に滑らないようにするためのもので、敵の刃から自分の手を護ることは二次的なものとされる。鯉口を切る上で利便であることや、刀身との重量のバランスを取ることが鐧の重要な役目。

・手の内（てのうち）

柄の握りや、柄の支え方。刀の柄を握る左右の手の持ち方。握った両手の力の入れ方。抜きつけた時の右手の締め方。切り付けたときの両手の締め方、など。

・道場（どうじょう）

武道・格闘技における練習や試合を行うための施設。道場は単なるトレーニング場ではなく、神前にて己の境涯を練るための浄域とされる。

・刀礼（とうれい）

刀に対する礼。刀を正前に置き、神前に向かって敵意のないことを示す動作。

◆な行 _____

・莖（なかご）

刀の金属部のうち、柄に入る部分。^{なかご} 莖には目釘孔（めくぎあな）が空いており、銘（作者の名前）が打ってあるものもある。

・薙ぎ（なぎ）→太刀筋

☆右薙ぎ：右から左への水平の太刀筋。

☆左薙ぎ：左から右への水平の太刀筋。

・なんば歩き

武士が腰に二刀差し、手を振ると歩きにくいので、この半身ずつ出て行く歩き方。前に進むために、右足を踏み出すと、右腰が出て、右手が振り出される。以上で一步。左足を前に踏み出すと、左腰が付いて出て、左手が振り出される。

現代の私たちの普段の歩き方では胴回りをねじって歩くために着物がすぐさま肌蹴（はだけ）てしまうが、江戸時代までの人は一般庶民も歩くとき胴回りをねじらぬ様に工夫して歩いていたと考えられる。

・抜き打ち（ぬきうち）

刀を抜くや否や斬りつけることを云う。右手で抜かず体捌き^{たいさば}で抜くことが大きな斬撃力を生み出す。鞘離れ^{さやばな}と同時に斬りつけ倒すという意識のもと打ち込むこと。

・抜き付け（ぬきつけ）

鞘離れの一刀で、すばやく相手に切りつける。刀を抜きながら技法。切先三寸ほどを残すまで抜いたならば、鞘^{さや}を握っている左手を引き、半身から正対へと腰を入れて右足を一步踏み出すと同時に鞘を45度くらい左に傾け、右手片手で横一文字に敵の胸に斬り付ける。刀を抜いた瞬間に相手が倒れているくらいの気持ちでやることが大事。一本目の抜き付けは、その後の切り下ろしを想定された抜きつけで、二の太刀を想定してある。

・寝刃（ねたば）

切れ味の鈍くなった刃。

・寝刃を合わす（ねたばをあわす）

刃先の部分を僅かに研いで斬れ味を蘇らせると共に、少しだけ刃先を鈍角にする事で刃毀れの防^{はこぼ}止にも繋げる。

・納刀（のうとう）

刀を鞘に納めること。納刀が終わったときは、鐔^{つば}の位置は体の中央にある。

◆は行

・袴捌き（はかまさばき）

正座する時に袴の裾^{すそ}を掌（たなごころ）で静かに左右へ払うこと。古流では右手の掌で左に払い、その手の甲で右に払う。

・刃筋（はすじ）→太刀筋

刀の通る道筋のことで「刃筋が立つ」（刃が真直ぐに打突部位に向かって振られている）、「刃筋が立たない」（平打ち）、「刃筋がぶれる」などと使われる。

・はばき

鞘の中で刀身が鞘に触れないように浮かせるため、また、刀身が鞘から滑り出さないための金具。

・刃引き（はびき）

刃を引きつづけて切れないようにした刀。

・八相の構え（はっそうのかまえ）→陽の構え、陰の構え

刀を相手に向けて刀を立て、右手を右肩前、左手を鳩尾（みぞおち）においた構え。「木の構え」ともいわれ、自分の左肩越しに相手を見る。

・刃紋（はもん）

刀身の刃と鑢の間などにある波状の模様。製造過程で焼きの違いによっておきる境界線の模様。代表的な刃紋は次の通り。

☆直刃（すぐは）：刃文の波が無い。

☆互の目（ぐのめ）：低い細かい波が続く。

☆丁字（ちょうじ）：丁子菊のように見える。

☆のたれ：直刃からゆっくりと穏やかに波がでたような傾向。

☆濤乱刃（とうらんば）：波にうねりが出て来た感じ。

☆皆焼刃（ひたつらは）：地鉄一面に飛焼が入り複雑。

・半身（はんみ）→一重身

相手に対してからだを斜めに向けること。また、その姿勢。「半身の構え」。

・ひかがみ

膝の後面をひかがみ（脘、引屈）という。膝の前面は膝頭^{ひざがしら}、膝小僧^{ひざこぞう}という。膝は足裏以外では接地することが多い部位である。例えば踵^{かかと}を挙げ爪先と膝をついて座る座り方は「跪く（ひざまづく）」または「立て膝」と言う。ちなみに、爪先を伸ばして足の甲と膝をつくのを正座という。

・一重身（ひとえみ）→半身

半身よりも上体が開きほぼ真横に向いた状態。

・樋（ひ）

日本刀の刀身に彫られる細長い溝。「血流し」という別名もあり、斬った相手の血が樋の中を流れていく様子から付けられた。

・樋鳴り（ひなり）

日本刀を振ったときにでる「ヒュウツ」という軽快な風切り音のこと。

・開き足（ひらきあし）

身体を左右にさばく時に使う。足だけでなく腰で回ることが大切。

・袋竹刀（ふくろしない）

革袋に割り竹を入れて作られた稽古用の竹刀。最初に発明したのは上泉伊勢守とされ、袋竹刀“臺肌撓（ひきはだしない）”は、今も柳生新陰流に伝承している。

・武道の精神（ぶどうのせいしん）

「礼に始まり礼に終わる」。礼儀とは、思いやりや感謝の気持ちを持つ謙虚な心構え。

・踏み込み足（ふみこみあし）→足捌き

相手に素早く踏み込んで打つ時に使う。右足から踏み込んで左足で身体を押し出すようにする。特に踏み込んでからの左腰・左足の引き付け正体することにより素早くする事で次の動作が円滑に出来る。

・振冠り（ふりかぶり）

敵を上段より斬り下ろす動作。

・不離五向き（ふりごこう）→湧泉

五つ（目、足、剣、臍、心）の向きは、相手から離れず、必ず向いていること。

☆不離：離してはならないこと

☆五向：五つの向き

1. 目—相手の目をしっかりみること
2. 足—常に、足の爪先は、相手に向くこと。「湧泉」（足の裏にあるツボ）と呼ぶところ。
3. 剣—剣先は、相手から離さないこと
4. 臍—臍（へそ）は、相手の正面に向けること
5. 心—常に全力で、相手に向かっていくこと

◆ま行

・間合い（まあい）

敵と自分との距離“感”を云う。実際の物理的距離のみならず、感覚的な距離・角度・拍子・構え・戦法…等によって変化してくる。武術では間合を制した者が勝つとされている。間合いをはかる事が重要である。

★一足一刀の間：一歩踏み込めば相手に刀が届き、一歩下がれば相手の切り付けを外す事のできる間。

★遠間：一足一刀の間より遠い間。

★近間：一足一刀の間より近い間。

この他に、自分の手元の勢力範囲を「わが間」、敵の手元の勢力を「敵間」、精神面で相手の出方を正しく判断し、体勢や精神面を総合して自分から打ちやすく、相手から打ちにくい位置関係をとって戦う事を「心の間」という。

・間境（まざかい）

敵と自分双方の攻撃が届く距離の境界線のこと。間境を越えた状態を圈内、間境を読む技術を間積もりという。

・峯（または棟）（みね むね）

刀身の背の部分。

・見取り稽古（みとりけいこ）

他人の演武や稽古をしっかりと見ておく稽古。

・無双直伝英信流（むそうじきでんえいしんりゅう）

無双直伝英信流は江戸時代に長谷川主税助英信が開いた武術の流派。幾つもの分派があったと思われるが、明治以降残った二派を大江正路の門人達は谷村派、下村派と呼んだ。土佐に伝わった系統では、居合の祖とされる林崎甚助（重信）を初代としているが、これはあくまで居合の祖という意味で第7代の長谷川主税助英信を「流祖」と呼ぶ。流の開祖は長谷川主税助英信である。大江正路に谷村派を学んだ山内豊健（土佐藩主山内家の子孫）の系統は山内派といわれる。業前は次の通り。

☆正座：①前，②右，③左，④後，⑤八重垣，⑥請流，⑦介錯，⑧附込，⑨月影，⑩追風，⑪抜打

☆立膝：①横雲，②虎一足，③稲妻，④浮雲，⑤嵐，⑥岩波，⑦鱗返，⑧浪返，⑨瀧落，⑩真向

☆奥居業：①霞，②脛囲い，③戸詰め，④戸脇，⑤四方斬り，⑥棚下，⑦両詰，⑧虎走り

☆奥立業：①行連れ，②連達ち，③惣捲り，④惣止め，⑤信夫，⑥行違い，⑦袖摺返し，⑧門入，⑨壁添い，⑩請流，⑪暇乞い(一)，⑫暇乞い(二)，⑬暇乞い(三)

・明境止水（めいきょうすい）

月が水に映って、その水が波立っていない落ち着いた状況を武道の心の修行の教えとして表した言葉。どのような境地においても心が捉われることなく、動揺もなく、静かな胸中をいう。

・目釘（めくぎ）

柄の横から入っている杭。この目釘により柄と刀身は固定されている。

・目付け（めつけ）

相手の動きを目や筋肉、重心の変化の微細な動きで、行動を読むことをいう。遠山^{えんざん}の目付、二つの目付け、脇目付け、観見^{かんけん}の目付けなどがある。基本的なのは以下の四つ。

- ★遠山の目付け：目は相手の顔面につけながら、一点を凝視せず、遠い山を見るように、全体を視野に入れる。相手の構え全体を見て、隙や技の起りを見破る。
- ★二つの目付け：相手の顔面を中心に全体を見るのが基本で、特に相手の剣先と拳^{こぶし}に着目する。
- ★脇目付け若しくは帯矩（たいき）の目付け：目で動きを読まれないよう、相手の帯（腰）のあたりに目をつけて視線を合わせないようにする目付け。
- ★観見の目付け：観の目付けとは相手の心理状況を看破すること。見の目付けとは肉眼で相手の実際の動き見る目のこと。

その他に相手の目の動きなどを通してその意志を察する「二星の目付」、目を中心に相手の顔面に注目する「谷の目付」、特に小手に注意する「楓（カエデ）の目付」等もある。又、相手の肩に力が入って凝りが現れるのを「蛙（カワズ）の目付」という。

・目貫（めぬき）

柄^{つか}に付ける装飾品。古くは柄の握り具合を良くする為、または柄の強度を上げるため等の説がある。平安時代に目釘のような役割を果たしていた目貫が、時代につれて装飾的なものになったと言われている。差し表と差し裏の二つで構成され、差し表が鍔の方、差し裏が縁側に配置される。

・無構え（むかまえ）

両手を垂らして身構えることなくリラックスしたまま敵に身体を晒^{さら}すこと。これは誘いの構えであって単なる無防備とは異なる。これを駆使できるのは武術でも中級者から上級者とされる。

・木鶏（もくけい）

強い闘鶏は木彫りの鶏のように動かず泰然としている、との中国の故事に由来した言葉。

－ 荘子（達生篇） －

「あるとき紀省子^{きせいし}という闘鶏^{とうけい}の名匠が、周の宣王^{せんおう}のために闘鶏を飼育・訓練した。飼育を始めて十日もすると、宣王は紀省子に尋ねた。

一鶏はもう使いものになったか。

省子は答えた。

一まだです。いまのところ、むやみに強がって威勢を張っています。

それから十日もすると、宣王はまた尋ねた。すると省氏は答えた。

一まだ使いものになりません。ほかの鶏の鳴き声や姿ならまだしも、その声の響きや姿の影に対してさえ、さっと身構えます。

それから十日ほどして宣王はまた尋ねた。すると省氏は答えた。

一まだ使いものになりません。他の鶏を近づけると、またぐっと睨^{にら}みつけて気負いたちます。

それから十日ほどして王はまた尋ねた。するとこんどは、省氏は答えた。

一仕上がりました。他の鶏が鳴き声を立てても、もはや何の反応も示しません。遠くから見るとまるで木彫りの鶏のようです。闘わせてみたら、果たして他の鶏はみな背を向けて逃げ出しました、と答えたという。

・物打ち（ものうち）

実際に刀で斬りつける時に中心的に使う部分。刀身の中心よりも少し上の部分。

◆や行

・鑢目（やすりめ）

柄から刀身が抜けないように、莖に施される模様。地域や時代、刀匠の流派によって違うため、鑑定の際に見られる。

・柔（やわら）

古流柔術のこと。身体も心も柔らかく遣う極意だから、“やわら”と言う。

・陽の構え（陽の構え）→構え

相手から見て自身の急所が集まる正中線を正面から外し、こちらの刀身の長さを正確に視認できないように構える。金の構えともいう。一見すると自身の左半身（相手の正面右）は無防備であるため敵の攻撃を誘いやすく、その隙に相手の視線や意識から遠い下段や横から仕掛けることができる。そのため主に胴や籠手、そして下半身を狙った相打ち狙いには有効とされる。

・湧泉（ゆうせん）

足の親指の付け根より、やや土踏まずに寄ったあたり。足の裏の内側かつ前側の辺り。居合の構えをするとき、重心を置く位置のこと。普通に立って、踵^{かかと}を少し浮かせた時に体重が掛かる位置。

・横の血振るい（よこのちぶるい）

右手で刀身を右横に振り、血振るいをすること。「布を引き裂く」ような心持で行う。

・四節の礼（よんせつのれい）

神，師，同僚，刀霊に対する四つの礼

◆ら行

・理合（りあい）

戦闘理論のこと。居合の業は、すべて一人から多数までの相手動きが存在する。古流ともなれば、甲冑を着ているとか、騎馬であるとか、敵の人数などの属性も加わる。それらに対して、何故この動きをするのか、何故この太刀筋なのか、ということの説明。

・立礼（りつれい）→座礼

演武に際し、神殿・玉座に対する礼。演武の始めと終わりに直立体の姿勢で行う。

・礼式（れいしき）→四節の礼

礼式は人道の大本であり、武士道の真髄は礼儀そのものにあるとされる。礼儀は礼の発するところにして、礼は心、義は体を表す方式といわれる。

◆わ行

・脇構え（わきがまえ）→構え

刃を斜め下に向け右手か右脇下にくるように刀を保持し、相手の動きに対応する構え。体中に刀を隠して相手に自分の武器の種類や長さなどを知らせないことから「金の構え」ともいう。

